「恥」乗り越え 会いたい

差別・いじめ それでも募る出自への思い

父を捜して 上

オランダ日系2世の戦後69年

「戦争で引き裂かれた犠牲者」

メモ頼りに父と対面

日本のおみやげは宝物。妻ネルさんに、父の国の思い出を話すヒロシ・デ・ウィンターさん(左)＝オランダ・ローゼンダール市

オランダの日系2世＝🔑＝たちが、日本人の父親を捜している。反日感情の強い社会で、差別やいじめに苦労した戦争の落とし子」だ。戦後69年。人生の晩年を迎えた今、「ルーツ」への思いを募らせる2世たちを、オランダに訪ねた。

5月29日、札幌市。待ち合わせ場所に現れた男性(61)は、鼻、口、顔の輪郭、体格、どこをとっても、ヒロシ・デ・ウィンターさん(68)にそっくりだった。同じ父親を持ち、男性は「弟」にあたる。

「落ち着いて聞いて。実は、君に兄がいる」。親族から突然、知らされたのは2011年。「オランダ人なんだ」。頭が真っ白になったと男性は振り返る。

記者はオランダで、ヒロシさんにも会った。1946年4月、インドネシアのジャワ島生まれ。母はオランダ人。父は日本人で、綿花づくりに携わっていた。オランダ政府によると、戦争中、日本軍はインドネシアで捕虜4万人と民間人9万人のオランダ系住民を強制収容所に抑留。栄養失調などで2万人以上が死んだ。ヒロシさんは「日本人の子」といじめられた。

女手ひとつで育ててくれた母は、父を思いながら、93年に死亡。母が保管していた父の手書きのメモに、実家の住所が記されていた。それを手がかりに、「弟」へたどりついた。

11年秋に来日。弟に案内され、認知症を患う父に、施設で初めて会った。抱きしめて、母が大切にしていた若いころの父の写真を見せた。驚いたような顔をして、泣き出した。

しかし、ヒロシさんのように、父や家族が会ってくれる例はごくまれだ。男性は言う。「『恥』という感覚なのでしょうか。でも、戦争で無理やり引き裂かれた彼らは、犠牲者だよね」

■「父のことを知りたい」日系２世のひと言

ジョイス・コムダーさん(67)

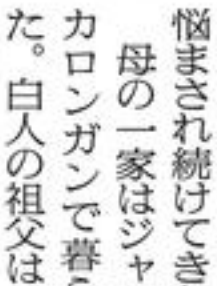
父は東部ジャワのマランにいた軍人の「ヤマシタ」。母は何も語らず1985年に死んだ。仮に戦犯だったとしても、父のことを知りたい

エドワード・レーマンさん(68)

父は「ムラカミマコト」。戦後、旅行会社などに勤め、77年に大阪市で死んだと聞いた。母が愛した父はどんな人だったのか知りたい

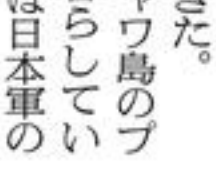
フレッド・アウヘンスタインさん(69)

父が日本人と知ったのは昨年。おばによると、病死した母は中部ジャワ・テガルの日本軍人用のバーで、父の「ナカノ」に出会った



テレーゼ・テル・ハイデさん(68)

私の日本名はケイコ。２歳上の姉はレイコ。父は東部ジャワのヌガンジュクで警察官だった「モリタダシ」。写真がほしい



ヨーケ・ステファン・ハウトさん(67)

父はジャワ島のコドソノで、鉄道関係の仕事をしていた「ヤマダ」。母より10歳年上だったが、母の家族の暮らしを支えてくれた

ユール・カウフスベックさん(69)

父が日本人と知ったのは2000年。おばによると、父はジャカルタにいた将校「ヨコイ」。母とは恋愛関係だったと聞いている

フランス・ハーベルマンスさん(68)

孤児院で育った。いじめられ、犯罪者になってもおかしくなかった。父はスマトラ島の軍施設で食糧を管理していた「ワタナベ」

🔑 オランダの日系2世

インドネシアを植民地にしていたオランダの女性と、戦時中の1942年にインドネシアを占領した日本軍の関係者や民間人との間に生まれた。戦後、連合国の方針で日本人の大半は単身帰国。インドネシアでは独立戦争があり、多くの母子がオランダに引き揚げた。2世は800人とも3千人とも言われるが、反日感情が強い中、事実を明かさない母親もいるとされ、実数は不明だ。

「たとえどんな悪人でも」

反日の感情薄れ 捜す

ロブ・シプケンスさん

「恥」は、日系2世を苦しめてきた感情でもある。

「自分は恥の子」。オランダ南部に暮らすロブ・シプケンスさん(68)は25年前に「実父は日本人」と知ってから、ずっとその思いに悩まされ続けてきた。

母の一家はジャワ島のプカロンガンで暮らしていた。白人の祖父は日本軍の捕虜となり、祖母や母は軍の食堂などで働かされた。

憲兵に乱暴されそうになった母は、父に一度は助けられた。だが今度はその父に、望まぬ妊娠をさせられた、と聞いた。「19歳でお前を産んだ。父には知らせていない」。母は言った。

日本人は残酷な悪人――。反日感情が強い中、シプケンスさんもそう考えていた。自分はこの世に存在してはいけない人間なのではないか。精神のバランスを崩し、働けなくなった。

転機は09年秋。元捕虜や日系2世を戦争被害者として招く外務省の事業で、日本に10日間滞在した。礼儀正しく、自分の生い立ちに熱心に耳を傾けてくれる優しい日本人がいた。

「日本人の血を引いたことは恥ではない」。そう思えた。

行く先々で、いつも日本語で話しかけられた。外見が日本人だからだ。「異物」扱いされず、社会に溶け込んでいる感じが心地よかった。今は懸命に父親を捜す。父の姓は「カワバタ」。「たとえどんな悪人だったとしても、父を知りたい。それは自分のルーツだから。自分の半分の錨(いかり)が、そこにあるのだから」

（編集委員・大久保真紀）

過ぎる年月

肉親捜しに「壁」

日系２世の父親捜しは本格化している。戦後も70年近くが過ぎ、当時を知る関係者の多くが他界。危機感を募らせたオランダ在住の日本人研究者らが2012年、「アジア太平洋戦争日本関連史資料および学術連絡支援財団（ＳＯＯ）」を設立した。フィリピン日系２世の身元捜しに実績のある日本のＮＧＯや、戸籍謄本の写しを取れる法律事務所とも連携。これまでに約40人の父親が判明したが、多くは死亡していた。半数は親族に拒まれ、墓参も実現していない。残る２世はＳＯＯに「最後の望み」をかける。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。